



スペイン巡礼 Camino de Santiago 補遺

スペイン巡礼 (Camino de Santiago) の巡礼道は、大概は大都市や中都市にあるポピュラーな聖地の教会や聖蹟を線ではなく点で繋いで歩くルートが多い。このことは、例えば日本の四国八十八箇所遍路道などの巡礼路は円環型をなして、徳島県鳴門市にある発願寺 (第一番札所) の霊山寺から出発して時計回りに徳島県、高知県、愛媛県、香川県の各札所を巡り、最後の第八十八番札所・大窪寺 (香川県さぬき市、第1番札所のすぐ近く) で結願した後に、再度第一番札所に戻って遍路満願終了の報告参拝をすることが慣習となっている。所謂「円環型巡礼」方式である。

一方、西洋では、自分が信仰する神や神殿だけを参拝して戻る直線型巡礼が主で、聖跡をグルグル廻るといったスタイルは無く、最終目的地の聖地だけを訪ねるといったスタイルとなっている。

このことは、日本ではアニミズム時代からの土着宗教も含めて多種多様な神仏は勿論のこと、他人であろうが味方であろうが敵であろうが、自然であろうが災害であろうが、全て仏縁が宿っているとして受け入れるという多神教的な精神風土があることに対して、西洋では自分が帰依した神様以外とは全く付き合わない (即ち帰依した一神との契約しか信じない) という一神教的土壌に立脚しているという宗教観の相違によるものであろう。

換言すれば、日本の宗教では諸々の神仏、及びそれらを宿している自然と共存して巡り歩きながらグルグルと廻る (輪廻転生の思想に通底) のに対して、西洋の宗教は一神教であるが故に彼らの巡礼の形態は自分たちの神や神殿だけを往復して戻る直線型往復運動であるから、巡り歩くという発想が無い。只々自分自身を見つめて黙々と歩くのみらしい。

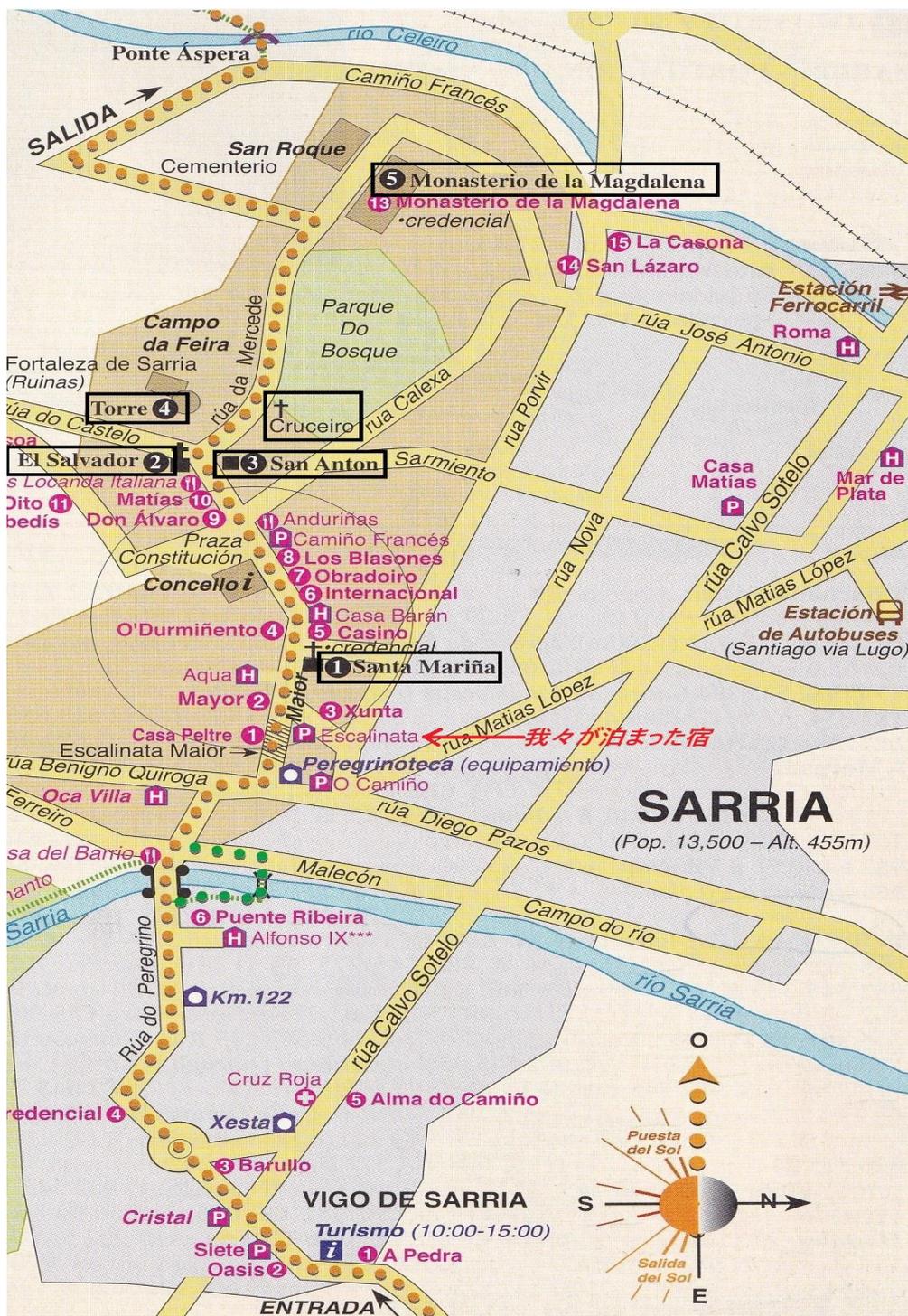
マ、何れが良い悪いという事ではなくてそれぞれ数千年と続いてきた文化風土であるから、それはそれで良しとしても、スペイン巡礼の道行はやはり我々日本人にとっては「グルグル巡る」という感覚ではなくて「一直線に聖地を目指す」という感が強い。即ち、気が趣くままに徒然に歩くという感覚ではなくて、脇目も振らずに一心に目的地に向かって進むという感覚であろうか。

そのために、巡礼路上に転々と存在している聖蹟の参拝も、唯々クレデンシャル (通過証明スタンプ) を貰って通過するのみで、市街地の人込みの中を点から点に慌ただしく渡り歩くだけのようにも思える。上述したような我が国の精神的風土に慣れている我々には、四国遍路の誰も居ない山中の静かな巡礼路をトボトボと歩んだ時の情景が懐かしく蘇ってきたりする。

さて、少々理屈が過ぎたが、それは兎も角・・・。別項の主稿「Camino de Santiago (スペイン巡礼紀行)」では、主な巡礼地での紀行の様子をピックアップして紹介したために慌ただしい報告になり、また巡礼自体も慌ただしい道行であった部分も多いが、ゆっくりと時間を掛けてノンビリと廻れる聖地も多いので、本稿ではそのような聖地の一つであるサリア (Sarria) を紹介したい。

サリアは、巡礼路「フランス人の道」800kmの終点近く、最終目的地サンティアゴまで僅か約100kmというガリシア地方への入り口の街である。人口は1.5万人ほどの田舎町であるが、6世紀にはローマ人が移り住み始め、10世紀頃からは巡礼者の宿や救護所もできて巡礼者の宿場町として賑わった由緒ある街である。郊外には広大な耕地が広がる田園都市でもあるが、現在では商業都市としても発展しているようで、目抜き通りには大きなビジネス・ビルも建ち並び、また処々にマンションも林立している

活気ある町だった。下の地図をご覧頂きながらお読み下さい。(↓ スペイン北部でのサリアの位置)



(サリア市街地図 中央左上の褐色部分がセントロ史跡地区旧市街 引用出典 : Camino de Santiago Cartes)

サリアは下の写真に見えるように、随所に小高い緑の丘があり、その丘の合間に集落が入り込んでいる地勢となっている（下写真）。前ページの下の地図で褐色に塗られた史跡地区も樹林帯に囲まれた緑の台地となっていて、下の写真では手前奥に位置している。この台地は一周しても僅か6km程度の狭い台地であり、この“緑の島”の中に史跡や聖蹟が点在しているので半日から1日間程度の樹林帯ブラリ散策には実に好都合な地勢となっている。奥に見える山はモミアントス高地(Alta Momientos 660m)でこの山を越えた100km向こう側に終着目的地のサンティアゴ・デ・コンポステーラの街がある。



(緑に囲まれたサリアの町並み)

さて、余談はさておき、まずはここサリアで泊まったペンション（オスタル）が良い宿であったので、先にその宿を紹介しておきたい。宿の名前は「ペンシオン・エスカリナータ」（Pensión Escarinata）という（右写真）。我々に宛がわれた部屋は最上階の4回にある部屋だったので眺望も優れていた。上の写真も部屋の窓から写したものである。部屋代はツインルーム1泊46€。

部屋の設備は年代物ではあったが、3ベッドが入った広い部屋で大きな窓が開放的であった。オスピタレイロ（世話人）のオジサンも愛想が良



(Pensión Escarinata。左上の路上に針金で張ってあるのはカミーノ巡礼のキャラクター「シャコベオ」(Xacobeo))

かった。場所も史跡地区台地の入り口にあるので、どこに行くのにも便利であった。階下にはバルがあり、宿に帰り着いて乾いた喉を caña の泡でチョット潤してやるにも好都合であった。このバルはオジサンが話し好きだからであろうか、ご近所の井戸端会議の寄り合い場所にもなっているようで、朝からビールやワイン片手に賑やかなことであった。



(↑ 部屋には年代物の天井ファンが廻っていた。人物は相棒)
(乾いた喉に caña をチョット一杯、これは堪らん。人物は小生⇒)



朝は宿の下の巡礼路を登って来る大勢の巡礼者の声で目が覚めた。早朝の6時頃からの行動開始であろう(写真右)。

さて、我々もブラブラ巡礼を始めるとしよう。宿の前から直ぐに上り坂の石畳の径となるが、沿道にはアルゲルゲやバルや巡礼用品店が軒を並べていて巡礼宿場町の感が深い。



(↑ 巡礼者が続々と登ってくる)

(← 宿の直ぐ上の巡礼路小路。奥に見えるのは教会の尖塔)



(右手のバルの壁にはカミーノの標識が描かれていた)

この坂道をちょっと登ると、右手に教会が見えて来る。サンタ・マリーニャ教会 (Iglesia de Santa Mariña、地図で①、以下同様) である。坂道から見上げると坂道の真上に尖塔が屹立していて古色蒼然とした荘厳な教会であった。教会の下の道路の壁には巡礼者の群れが描かれていて、風雨で消えかかっていたが、風格を感じさせる絵であった。

このサンタ・マリーニャ教会はミサの時間以外は閉門となっているので要注意。

週日 18 時、日曜日 12 時のみ。



(サンタ・マリーニャ教会とその下の壁に描かれた巡礼者の群れ。消えかかっていたが、風格があった)

(サンタ・マリーニャ教会の
主神サンタ・マリア像)



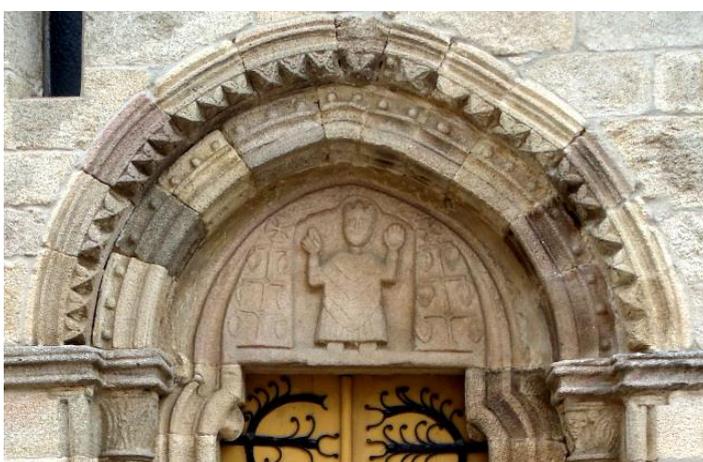
サンタ・マリーニャ教会からアルベルゲが並んだ石畳の路を少し歩いて上ると、SARIAの文字モニュメント標がある三叉路に着く。このコーナーにはサン・サルバドール教会(②Iglesia del Salvador)がある。この教会は前述のサンタ・マリーニャ教会に比べれば極く小さな教会であるが、1000年近く前の11世紀に建てられたロマネスク様式の品がある建物であった。



ファサードには微笑ましい姿の人物の彫刻が掲げられていた。この町の基礎を築いたレオンの王・アルフォンソ9世の浮彫だそう。彼は、巡礼中にこの地で亡くなったという。この近くの路傍には正装の立派な銅像も祀られているが、こちらもどこか微笑ましい姿に彫られていた。今でもサリアの人々は我が町の恩人として敬愛しているのであろう。教会の開扉は日曜日の夕方のみなので、要注意。



(サン・サルバドール教会)



(同教会のファサードに掲げられたアルフォンソ9世の像)



(←サリアの路傍に祀られていたアルフォンソ9世の像)

サン・サルバドール教会の向かい側には「③サン・アントン救護院」(Hospital de San Anton)が建っている。19世紀まで巡礼者の病気救護や行き倒れの面倒を見ていた施設であるが、今は裁判所となっている。日本の遍路道の路傍にも行き倒れ遍路などの墓や供養塔などが見られるが、こちらのカミーノではちょっとした聖蹟地には昔はどこでも巡礼者の為の救護院(Hospital)があり、教会や慈善団体によって運営されていた。それだけ、スペインのカミーノ沿線では巡礼者を尊び敬い、大切にしていたのであろう。



(旧 サン・アントン救護院)

さて、喉も乾いた。今は裁判所となっているこの建物の隣にはバルがあるので、路傍の日傘の中で通りに行く巡礼者の姿でも眺めながらビールの一杯でも飲んで喉を潤そうではないか。この三叉路を少し上れば今は廃墟になっている城址の苔むした物見塔が見えて来る(右写真、④Fortaleza de Sarria y Torres、サリア城址)。崩壊が激しくて今は入れないが、三橋美智也の「古城」が彷彿としてくるような古色蒼然たる佇まいであった。



(苔むしたサリア城址の物見塔)

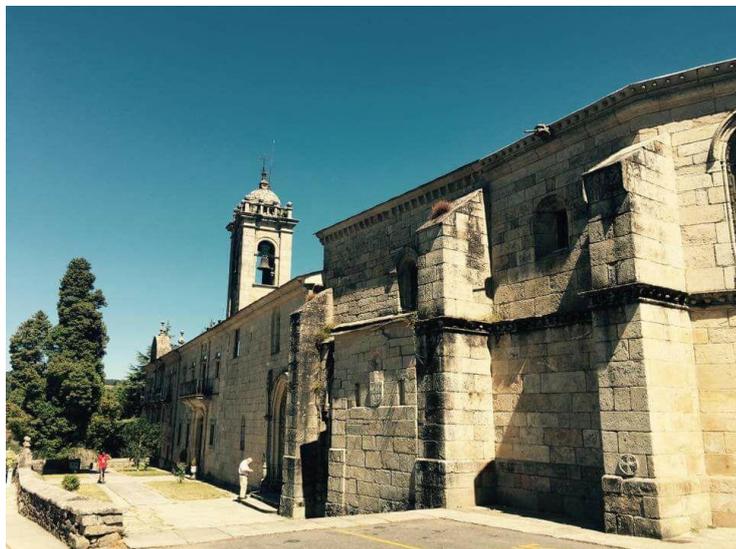
♪♪松風騒ぐ丘の上 古城よ独り何偲ぶ 栄華の夢を胸に追い ああ 仰げば侘し天守閣〜・・・♪♪。

この城址を左側にして樹林帯の山道を少し行けば、樹林の斜面に往時の牢獄の建物が残っていた。果たして昔はこの牢獄の中でどのような刑が執行されていたのであろうか。今はカミーノの案内所になっているが、周囲が陽が当たらない暗い樹林の所為か何となく暗幽な気配が感じられた。そのすぐ先には樹林帯が切れた場所があって展望台が設けられ下の市街地がよく見えた。ガリシア地方ではカミーノの路傍でよく見かけるクルセイロ(キリスト受難の磔像を正面にして、裏側には聖マリヤか聖人の像が刻んである石造りの十字架)が建てられていた(④右側のCruceiro)。



(←往時の牢獄の建物) (↑展望台のクルセイロ)

さて、ここからの巡礼路は平坦になり、やがて下り気味となって史跡地区の西端に下って行くが、そのドンヅマリには中世の救護施設であったマグダレーナ修道院(⑤Monasterio de la Magdalena)があった。どっしりとして風格のある石造りの建物であった。今は石材で閉じられているが、そのファサードにはどこかの聖人像が掲げられていてなかなか品格のありそうな趣が感じられた。この修道院の中は広い中庭を囲むアラブ風の回廊が設えてあった。コンキスタドール以前に建てられたものであろうか。今はアルベルゲ(巡礼宿⑬)も併設しているそうなので、一度泊まってみるのも一興ではなかろうか。



(マグダレーナ修道院)



(趣あるファサード)



(中庭と回廊)

以上でサリアの史跡の丘をほぼ一周したことになるが、如何であったであろうか。この丘もカミーノの巡礼路であるから、巡礼の人々も歩いてはいるが、街中の雑踏が無い分落ち着いてゆっくりと歩けるのでオススメである。

宿への帰途には沢山のバルが開店する時刻になるので、ガリシア地方の海鮮料理をツマミにビールやワインで疲れた体にエネルギーを注ぎ込むのも悪くなくろう。



(この修道院の祭壇)

本稿完 (2024/09/16)